

かじわらいちりゅう  
**梶原一龍 ギャラリートーク**

梶原氏 : おはようございます。こんなにたくさんの方に来ていただいて恐縮しております。

あまり話が得意な方ではないので、つまることがあるかもしれません。私が地元で浮立面を主に手がけるようになって、制作する過程において色々思ったこと、解き明かしたこと、必ずしもこれが正しいということではないかもしれないが、そういったところの話を聞いていただければありがたいなと思います。



つい 1 週間くらい前にテレビの放送で、土偶が出てきたというニュースをご覧になったことはないですか？ 土偶というのは早く言えば、土人形です。ちょうど一週間くらい前のニュースです。これが、非常に古いということで、1 万 1 千年前のものであろうと言われていています。

私が何を言いたいかというと、物を作る原点ということからすれば、1 万 1 千年前の人々が、どういう思いがあって、そういう形を作ったのか…。たまたま私がニュースで見たのが、ちょうど人間の胴体で、首から下の女性の像で、どこで発見されたのか聞きそびれてしまいました。1 万 1 千年前という魅力とその時代の人の思いを ふと思ったわけです。

そして、「あっ！そうか」と思って持って来たものがコレです。単なる杉の木なのですが、実はコレは 3 万年前の杉の木だと言われていています。回しますので手にとって感触を、硬さなど感じてみてください。

コレは、14～5 年くらい前に上峰のほうで 3 万年くらい前の地層から出てきたということで、これもニュースになったので、その時に即その場所に行って、ヨコシマな気持ちもありましたが(笑)、興味があったということ。それから、もし こういう破片のいくらか固まりをもらうことができたなら、それを使用して面を彫りたいなと思いき行きました。ところが係員の方は「そうはいきません。」ということで(笑)、せめてコレだけということでももらいました。コレが 3 万年くらい前のものです。



後に、学者さんが言うには、ちょうど 1.5m (直径) くらいで、全部で 20m (長さ) くらいあったでしょうか。そして黒こげなんですね。それで、その後に放送されたのは、阿蘇山の噴火、火砕流によって倒木した杉の木であろうということでした。想像もつきませんよね。3 万年前というのは。先ほど 1 万 1 千年前の土偶がでてきたと言いましたが、はるかに その土偶より古いのに形を整えている。

それからコレは楠の木です。実はこの楠の木は 1,000 年くらい前のものです。コレも回します。

こういう風にして土の中からたまに出てくるわけです。この木の場合は、1,000 年以上経ったものを「しんだいぼく神代木」といって、神様が住んでいた代という意味ですが、非常に貴重なものだと思うのです。私はできるなら、面を彫るぐらいの大きさのものが手に入らないかなと思っているのですが、未だにそれは実現していません。それは武雄の方から出てきたもので、だいぶ色が変色していますが、おそらく時代によって変わったものだと思います。

そういう具合にして、形あるものは保存の仕方でも、何代も、何千年も、何万年も、形を整えておくということは、私にとって非常に興味をそそられるのです。

日本の中で、こういう面の形を残している物はいつの時代のものかということ、だいたい6世紀のものかと言われています。6世紀なので、1,600年くらい前のものが東大寺とか正倉院、それから国立博物館なんかぎがくめんに伎楽面として残っているわけです。

私がちょうど20歳の頃、まだあまり認識がない頃に彫ったものがありまして、伎楽面を持って来ました。これはバラモンという伎楽面で、20歳の頃ですから、まだ何十年かしか経っていません。実際はそう古くはならないですね。当時からこれに近いような仕上がりになっているものだから古いように見えるわけです。実際の伎楽面というのは1.5倍くらいに大きいです。そういったものが大陸の方から仮面舞踏として入ってくるわけです。これが面の歴史の始まりだろうと思います。



その前にこういう面があったかどうかというのは解明できておりません。先程言ったみたいに、土偶はいつ出てくるかわかりません。また別の、日本人のルーツ、日本人の感性から出来上がったものが出てくるかもわかりません。ちょうど縄文時代というのは、大陸文化が入ってくる前ですから、土器などにも大きな違いがあるように、面にも違いがあったらうなと想像がつかます。そういう風に6世紀に伎楽というものが入ってきて、それに伴う面もいっぱい入ってくるわけです。

その後、7世紀から8世紀にかけて舞楽というのが大陸から入ってきます。仮面舞踏です。それが定着して、今でも舞楽というのが伝承されているわけです。宮中や春日大社、厳島神社などですね。あまり伝承されてはいませんが、特に春日大社や宮中などでは正統な流れで受け継がれています。

ちょうど20年まではならないと思いますが、こういうのはめったにあちこちで見れるものではないですが、鹿島の市民会館であったわけです。どうして舞楽が鹿島で舞われたのか不思議だったのですが、後に聞いたところでは、春日大社から来られたその時の宮司さんが鹿島と縁の深い方だったということで、たまたま見まして非常に感銘したことがあります。そういう風にして舞楽というのは今に受け継がれているわけです。いわゆる浮立面に至るまでの話です。

その後、9世紀から10世紀にかけて、仏教行事の「行道」ぎやうどうというのが入ってくるわけです。行道というのがどういうことかということ、ねり供養、仏様の姿をして外場歩きそとばをして、民衆の間に仏教を広めるといふ儀式なんです。だからあまり踊りそのものはないですが、行道というのが日本に大きな影響を及ぼしたわけです。

10世紀になると、それに付随する仮面劇なんかも入ってくるわけです。もちろんそれに伴って鬼の形なんかも入ってくる。はがみやま母神山古墳（香川県観音寺市）かなんかに、7世紀頃ですが、鉄剣の柄頭つかがしらという一番先の方に、鬼の姿をした象嵌ぞうがんが出てきたと新聞に載ったことがあります。当時から鬼の姿があったのか、しかも剣にものを施すということは、何かいわれがあるのだなという疑問が残っています。

その時代になると、民衆の間では、儀式みたいなものはあまりなかったんですね。仏教や舞踏が入ってきて、それに刺激を受けて、土から筍がニョキニョキ出てくるように、いろんな舞踏が出てくるわけです。そこに刺激を受けた面、たとえば舞楽面にしても伎楽面にしても、これは明らかに日本人が作ったものであろうと思われます。感性が違う。仏さんでも、他の国のお釈迦さまと日本のお釈迦様は造形が違う。同じ仏教であっても、彫りものとか、姿に現すとすると、日本人の感性で作り上げていくわけです。

10世紀から11世紀にかけて、「猿楽」という、民衆の間で面白く余興的な芸能が芽生えるわけです。猿楽は能楽にどんどん発展していき、一部階級層のものに発達していくわけです。それが、一部では、田楽と言って、田んぼの神事として発達するわけです。当時は田楽浮立と言いました。昔は田んぼの楽、風立つと書くらしいですね。それが今では浮き立つとなっておりますね。



月次屏風田楽舞図（東京国立博物館蔵）

これも参考に回しますが、国立博物館に月次屏風田楽舞図という屏風の絵ですが、東京の国立博物館に行けば見られるわけです。太鼓、笛、小鼓、大皮など、面をつけた翁というが、白色の翁と黒色の翁、正式には白色尉、黒色尉と言います。これは能楽でも使います。だから一番古い形式のものがこういう田楽舞の中でも見られるわけです。これが浮立という別の形で全国に浸透していくわけです。

今度、松坂慶子さんが市民会館に来られるそうですね。田楽舞と一緒に舞ってくれる人を10人くらい募集していると出ていました。どういう田楽を舞われるかはわかりませんが、田楽というのは、浮立田楽、そういったものがいろんな形で浸透する、そんな時代だったわけです。

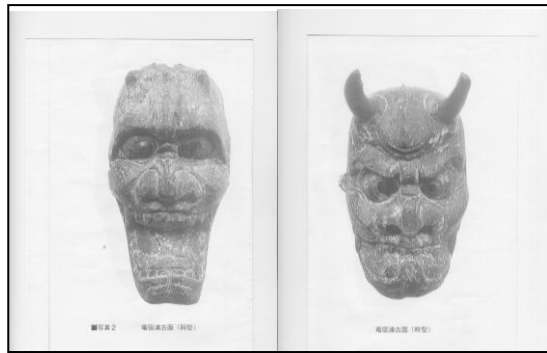
そういう経過を経て現在に至るわけですが、佐賀県では、浮立形態はいろいろありますが、面浮立が圧倒的に有名ですよ。全国でもトップクラスのいわゆる仮面舞踏なんですね。佐賀県で62くらい、鹿島で25くらいの地区が伝承されている。これだけたくさんの芸能保存会の地区が伝承されている。素晴らしい芸能が鹿島にはあるわけですね。私も親父も皆さんが親しく芸能に舞っていただいているおかげで、仕事として今現在もあるわけです。そういう芸能がなかったら、私はここで育っていないし、何か他の仕事をしていると思いますね。そういう具合で、たくさんの面を使う芸能が残っていますね。

面を使う芸能で有名なところとして、能登の御陣乗太鼓がありますね。石川県の太鼓を囲んで5人ばかりでやる。それから岩手県の鬼剣舞、こちらの浮立面のようにシャグマをつけて面をつけた芸能。それから、佐渡の鬼太鼓もありますね。

これほどたくさんの面をつけた芸能が佐賀県にあるというのは、日本一だと思うんですね。世界の中でも日本は仮面大国と言われてます。面の歴史からいうとですね。その仮面大国の日本の中でも佐賀県は特に、60いくつもの地区が伝承している、しかも隊列を組んで踊るとなるとですね、これほど密集した仮面舞踏を伝承しているところは他にはないはずですね。世界のどこを探してもないですね。これがギネスにでも載るようになったら申請してもよいのではないかと思いますね。そういう思いをしております。そのような浮立というものが地元にあるということです。

私も若いころは、単に彫ればよいと、独りよがりのところもあって、勝手気ままに変えてみたり、カッコ良くしたりしていたこともあるのですが、そうではないと気付いたわけです。制作する過程の中で、これだけ60いくつもある地区の中で、どこが一番古い面をもっているのだろう。それがわかれば、面浮立のルーツがわかるのではないかと思ったわけです。それが一つのきっかけになって、探せばそんなに難しいことではないですよ。鹿島がおそらく中心の地区だろうと思うのは、伝承地区から考えれば、一番中心地にあってもおかしくないですよ。その中で一番古いもの、県内で一番古い面は何なのか。

そこで私がそうではないかを見たのが、竜宿浦の面です。(写真を示して)これが竜宿浦の面です。おそらく県内で一番古い。形としては阿吽の像ですよね。結んでいる、開いている。こちらの方では雄面とか、雌面とか、男面、女面とかいうけれども、造形的には阿吽の像ですよね。



竜宿浦に伝わる面（左が女面、右が男面）

阿吽の像というのはどういうものか。周りを見渡すとすぐ見つかります。神社で言えば、狛犬とか、神馬とか、祐徳神社の楼門のところに左大臣、右大臣、手前には狐の像がありますね、仏閣では金剛力士像（仁王像）がある。仏教でもそういう形をしている。なんでそういう形をしているかということ、それは守護神なんですね。そこを守るという強い意図でもってできている。

民間では鬼瓦とかの風習がありますね。今では少なくなったけれども、昔は鬼瓦を屋根にあげていた。古い家を壊していると、屋根の本柱の上に結びつけたものがあります。これは長崎の方で見つけたのですが、私がたまたまススもらいに行ったとき、1軒だけ見つけたのです。どういう意図があって、結びつけてあったのか。これは小長井の浮立に使う面ですが、「にぞうめん」といいます。角はないですが、いかめしい顔をしている。そこを守護するという強い意図でもってできているなということが感じとれます。

それから色ですが、鹿島は黒の面が多いですね。私は勝手ながら、鹿島系と多良系に分けています。分けた方が便利だから勝手に分けているのですが、鹿島系は比較的に黒が多く、多良系は青が圧倒的に多いです。それと大きな特徴は、鹿島系は目尻が長いです。能古見にしても、小城にしても目尻が長い。多良は目尻が丸いです。そのような大きな違いがあります。

先ほど回した女面（竜宿浦の面の写真）を見てください。この面はちょっとだけ目尻があるんですよ。たとえば、この目尻がなくなるとします。これの目尻がなくなったら、ああいう形（竜宿浦の面）になってもおかしくないですよ。逆に目尻を長くしたら、これ（鹿島系）になってもおかしくないですよ。だからこれは非常に貴重なものだと思うのですよね。

実はこれも14~5年ほど前に、いつかこれを手元に置いて作らせてもらえないかと思っていたら、チャンスがあって、県立博物館から作ってもらえないかという話があって、私は喜んで受けたのですが、学芸員の方にせっかく作るなら古いものをやりましょうよということで、これが復元したものです。こういう彩色であったろうという想定のもとで作ったものです。実際には、色はほとんどないのです。色がなくなるほど古いものです。わずかに残っている部分があって、虫眼鏡で見れば、わずかに残っているところをたどるとこういう色になっている。こうして復元できたのです。

もし、これが漆であったなら、このように風化したようになるには、200~300年程度では絶対にはならないのです。私はたまたま竜宿浦の江戸時代のものを見せてもらったが、色がまだしっかりしています。江戸時代の後期のものだろうと思うのですが、200~300年で漆が変化することはありません。色がちゃんと残るのです。伎楽面にしても1,300年ですね。はく落はしているが、色がちゃんと残っているんですね。そういう状態であるということが言えるわけですね。



竜宿浦の面(復元)



では、いつ時分にできたのかということになりますが、佐賀に浮立が入ってきたときに面も入ってきたかということでもないですね。竜宿浦の人に聞けば、文書には残っていないが、六部ろくぶが竜宿浦に逗留したときに、お礼に残していったという話なんです。六部と言うと、仏教用語で修行する人のことですね。そういう人が竜宿浦に来て残していったということですね。

では、県外で、六部が他の所に行って、同じような面を彫っていたら、そう簡単にこのような面を捨てたりなんかしないですよ。神代木と一緒に、非常に大事にするんですね。そういう状況の中で、いまだかつて他には見たことがないですね。だから、何か特別な意識があつて六部という人が残していったのだらうと思います。六部が一番活発に動いたのは、鎌倉時代と言われています。その人が鎌倉時代の人であれば、それ以降これが竜宿浦に残っているということになります。それにもつながっている。私は、絶対とは言いませんよ。疑問に思っていることを言っているわけですから。そういう具合にして、竜宿浦に何らかの形で残されたと、そしてそれが浮立面の原点ではないかと思うわけです。私は学者ではありませんが、面に関してはいくらかは勉強したつもりです。学者さんはいろんな見地から見ていかれると思いますが。

では、長崎の方にそういう古い面があるかということ、先ほどお見せしたのもの、おそらく150年くらいのものかなと思います。それほど、竜宿浦の面は貴重な価値があると私は踏んでいるのです。当時、古い竜宿浦の面は、できるなら県の文化財にされた方がよいのではと申し上げたのですが、県の方は、まず市の方が先で、その後、県に申請して初めてなることですからということでした。私はその後のことは知りませんが、今は市の文化財指定になっていますよね。鹿島にとっては、竜宿浦の面、あるいはそれ以前も男面が一つ残っているかと思いますが、私はまだそれを見ていないのですが、それと比較してどうかということになります。私はこの竜宿浦の面が古いのではないかなと思っています。

こういう形がどこから来たのかなということですが、六部という人は何でこういう造形を作ったのかなと思うのです。私は空想の世界が好きなので、思うことなのですが、よくよく考えてみれば、面浮立の由来が、戦陣にまつわるものが多いですね。例えば、豊後の大友宗麟が、竜造寺を攻めた時、鍋島一族が一族郎党、面をつけて敵陣に夜襲し、戦勝の先駆けを作ったとか、征韓の役の時、戦勝祝いに船の上で鍋島一族が祝いに面をつけて踊ったというような由来がある。戦勝という「戦い」になぜ使われたのか、不思議ではない。

ここで面浮立をされる方はありますか。私も若いころ習いに行つて、実感として分かったのですが、両手で双眼鏡のように穴を作って目に当ててみませんか。これが面をつけた世界なんです。絶対これで、この視野で持つて、刀持ったり槍を持ったりして、ワーツと行って、なにも見えんとに、正面しか見えんとに、あーっという間にやられてしまうだけですよ（笑）。踊る時にも、ひと月ばかり一生懸命練習して、本番何日か前に面をつけて踊れと言われても、踊りえんとですよ。相手の背中しか見えんから。手や足をどう動かしていいかわからないですね。頼りは、音楽、鐘や太鼓や笛のいわゆる先行曲だけなんです。だから、桃太郎侍とか、切れるもんですか（笑）。

では何故、戦陣にまつわる話が由来として残っているか。そこなんです。それから考えると、あつたのです、それに匹敵するのが。本を探していると、舞楽の面の中に、蘭陵王らんりょうおうの面というのがあり、陵王、たまたま春日大社から来て鹿島で舞った舞は陵王の面をつけて舞ったのです。偶然か何か意図があつたのはわかりませんが、その時の舞が左舞と右舞というのがあつて、左舞にこの陵王

の面をつけて、頭に竜をつけて舞った。これが舞楽で言う左舞。こちらは納曾利<sup>なそり</sup>で、右舞。

中国の故事に、蘭陵王長恭<sup>らんりょうおうちようきょう</sup>という武将がいて、非常にいい男。今でいうイケメン男で、味方の士気があがらん。そこで、ことさら恐ろしい面をつけて戦陣に赴いたという故事があるわけです。それが陵王です。陵王の面と戦がつながるわけですね。

ただ単に戦につながるだけでなく、竜宿浦の面は雨乞い面とされている。これをかぶって踊ると、雨が降ると言われているんですね。それほど、それに愛着とか、願望とか、願いとかが入っているわけですね。

たまたま考えていたら、竜宿浦は、竜の宿る浦なんですね。地名は。蘭陵王の頭につけるのは竜なんですね。雨とか水に関するものをすべて掌握しているのは竜だと思います。これが非常に結びつきがあるのではないかと個人的には思うのです。これが原点だとすれば、浮立面をこれから先理解していく上において、重要になるのではないかと思います。先ほど申しましたように、阿吽の相というのがある、それから守護する意味があると思うのです。

それから、圧倒的に黒が多い。他に、青とか、赤とか、4色ある。この4色というのは、何かということですが。自分ばかり興奮していますが（笑）、これも思い入れですから、個人的なですね。

これは、高松塚古墳とか、キトラ古墳とかの壁画に描かれている図ですが、北が玄武、玄武というのは黒い亀、それから南の朱雀<sup>しゅじやく</sup>という赤い鳥、白虎<sup>びやっこ</sup>、東の虎、西の龍、西の青。他にないかと思っていたら、大相撲の垂れ房。赤房、黒房、というように、国技と言われている相撲の土俵の上にもそういうものが施されているというのは、いかにそこを守護しよう、悪霊が入らないようにという意図で持って、壁画につけられたり、垂れ房とか布につけられたりしているというのが、だんだん見えてくるのです。果たして正確かどうかはわかりませんが、私は素人ですから、学者ではありませんから。でも、行き着くところはそういうところに行ってしまうんですね。

それでは、いつの時分にこの色が施されたかということですが。もともとはこの面（竜宿浦の面）は白なんですね。（塗面を指して）これは漆です。だけどこの白は漆ではないのです。よくよく観察すると、表面にあるのは顔彩です。顔彩というのはニカワと極有彩色で施されているのです。私は、拭き漆ではないかと思うのですが、その上に、漆を薄く拭いて、雨やなんか打たれてもはげないように、そういう細工をしてあるのではないかなと判断したのです。それで、生漆を塗っているんですけどね。実際には、隈取<sup>くまどり</sup>なんか見えますもんね。実際には見えんとですよ。ずっと点々やなんかをたどって行き着いたところがこういう色です。小城の雄面は隈取がありますね。共通するものがあります。目も飛び出ている。実際は銅板なんです。銅板で、飛び出ているように作ってある。女面もそう。だけど今の女面には飛び出ているのは見かけない。男面には見かける。名残なのかなと思います。

では、隈取というのはいつの時分にできたのか。歌舞伎の役者さんは隈取をされますね。面の代わりに、ああいう化粧をするわけですね。そして、自分をよりアピールするために隈取をする。そういう技法がある。また、能面の中にも隈取がある。たまたま私は、大癒見<sup>おおべしみ</sup>というのをしていますが、これにも隈取が施されている。非常に古い時代に隈取の技法はあったと思われます。中国でいえば、京劇なんかに隈取が盛んにされていますね。いろんな意味で出来上がっていますね。

色にしても形にしてもですね。こちらの方は5本歯<sup>ごほんば</sup>といって重宝される場所があるんですよ。地区によって。母ヶ浦の面は前歯が5本歯、能古見の女面も前歯は5本歯<sup>ごほんば</sup>なんですね。そして先面<sup>さきめん</sup>といって非常に喜ばれる、何故先面なのかはよくわからないのですが。でも、5本歯<sup>ごほんば</sup>といって喜ばれる。そういう数に対する思い入れがあると思います。

田楽の屏風絵にある翁の皺とか、ちょん髷の生え際とか、単純化して手書きをするのですが、皺の数は圧倒的に奇数が多い。能面に至っても奇数で描きます。中には数えてみてアレッと思うものもあるのですが、私としては奇数のほうがいいな。能面の原点の翁にしても、数にしても、奇数と言われるものにこだわっている。そういう意図でもって、前歯とか、皺の数とかができているとすれば、非常にいいのかなと思う。私が今参考にしているのは、こういう古いものが来て、自分なりにできるだけ忠実なものを作ろうと思うのだけど、ちょっと変えたいと思うのは、そういうところにあります。色にしても、できるだけそういう色を使う。無理にして使うことはないのです。皺なんか特にですね。無理して使って造形が壊れるようであれば、保存会の人に申し訳ないので、そういうことはできるだけせんですけども、ちょっと1本入れることで奇数になるのであれば、奇数に変える。そういうこだわりを持ってしています。

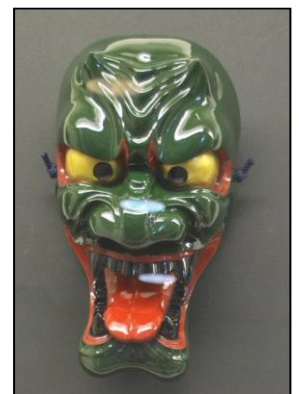
では、昔の人が、どういう思いでそうしたのか。誰かが命令でしたのではないと思うのですね。自然発生的な願望があって、こういう形につながっていったのかなと思うのですね。翁にしてもですね。白色の翁は、どういう意味を持った面かというと、天下泰平とか、国土安穩を祈る儀式に使う。黒色の翁というのは、五穀豊穰、家門繁栄、子孫繁栄、そういったものを祈る時に使う翁なのです。そういう風に区別されている。そして、能楽でも神聖なものとして、別格に置かれている。よほどのことの時に使う。鹿島のたくさんの地区の人たちが、昔の人たちがこれだけの面を伝承して残している、なんかそこに大きな願いとか願望とか、団円で踊りますからね、みんなでそういうものに立ち向かって守っていこうとする意図でもってできていたとすれば、すばらしい芸能だと思うのです。実際にチャンバラしたわけではない。でも、古いものから探し出していけば、どういう意図で持っているのか見えてくるわけですね。ひとりよがりですけど、なんでんかんでん良かとかばっかり持って生まれた浮立面だと私は惚れこんでるわけです。だから、こういう風に一生懸命仕事になりよるわけですね。

そういうふうにして、あまり一生懸命して最近腰を痛めています(笑)。いずれにしても、そういう意図で持ってこういうものができて、かなり古くから形として地元に残って、先まで伝えられていけばよいなあと思いながら、そういうことが少しでも皆さんに伝われば今日来たかがあるなあと思いつつしゃべらせてもらいました。

#### <質疑応答>

**【質問1】**面を見ていると、舌の先が1カ所だけ下に垂れているが、それは何故でしょうか。

(回答) 多良のこの形をこういう形に変化させるにはどうしたらいいか。目尻がちょっとあるのをなくすと、ああいうふうになるでしょう。口も鹿島系のもは少し上にあがっているのです。しゃくれている。全体的には、舌の方が長いのです。鹿島系も多良系も長い。最初の作り手が、多良の方の作者がいたとすれば、こういうものを作ったとしても不思議ではない。もし、鹿島の方でこういう形を作りたいと思えば、変化してきた。これはお歯黒ですね。実際には色はないんですよ。ないので、いろんなふうにとられる。そういう風にして、変化が見られず。芦刈とか、久保田、三日月、多久、あの辺りはみんな舌がしゃくりあがっている。多良系は下がっている。それが特徴ですね。目も、口も、色にも特徴がある。多良系は青が多い。



多良系（女面）

**【質問 2】** 浮立の舞の形から見ると、衣装の派手さとかから、音成の浮立が黒装束なので一番古いのではないと思っていた。竜宿浦の面が古いから、舞もそこが一番古いのか。

(回答) 竜宿浦の地区が踊りも始めたのかどうかは別のこと。面は、ここが原点だと思う。それから、たまたま大事にされていた面を浮立と合体した部分も無きにしも非ずだと思う。あっていい。おかしくない。浮立はいろんな形で入ってきている。そのなかで、うちの地区はこの面を使ってやろうと思った人がいたかもしれない。それは当時の人に聞いてみないとわからない。あの世に行ってから調べてみますので(笑)。そういうわけで、面は古い。踊はどこが面をつけて踊り始めたのかはわからない。竜宿浦は、昔は小浮立というのがあったそうですね。面浮立ではなくて、小浮立というのは面をつけない。吉田あたりが、小浮立というのがあの時代に盛んに行われていたと聞いている。だから、竜宿浦で、何故小浮立に面をつけて踊ったのか、そうではないかもわからないですね。

**【質問 3】** <sup>がんさい</sup>顔彩とは何ですか。

(回答) 顔彩というのは、牡蠣殻の粉とか、ハマグリの粉とか、貝の粉です。この辺で言えば、牡蠣殻などを精製して粉にして、それに顔彩という泥絵具、正式には水干すいかんと言いますが、粘土の乾かしたものが水干ですが、それをニカワと練って作ります。ニカワはなんでできているかということ、動物の骨、魚の骨を煮込んで作るのですが、そういうものを利用してある。だから水には弱いのですね。

**【質問 4】** 面の木は？

(回答) これは、桐の木です。桐の木が圧倒的に多いです。なぜ、桐が多いのか。それは、軽いんですね。掛け打ちさんが1時間も2時間も踊るのに、やっぱり軽いとから取んさっですもんね。踊り用にするならできるだけ桐の木がよいそうです。飾りとは違いますからね。

**【質問 4-2】** 飾り面は楠が多いとでしょ？

(回答) そうですね。だいたい佐賀県は楠が圧倒的に多いですね。県木も楠ですからね。楠も二通りあるとですよ。木に南と書くでしょ。それと、木に章とも書きますね。その二通りあるのはなんだろうと思ったのですが。最近あまり見かけなくなったのですが、赤楠というのがありますね。通常この辺で手に入るのは白楠なんです。年輪が、真ん中の芯が、はっきりした芯があるのですが、その周りが非常に白っぽい。それが白楠です。赤楠は年輪が、年輪はあるとですよ、1年ずつ太るので。その赤身のところが全体にあり、非常に柔らかいのです。もし赤楠が手に入ればそれに越したことはないですね。飾りものでも何でもですね。非常に肌がきれいです。白楠は少し硬いですね。

**【質問 4-3】** 見分け方はありますか。白と赤と。

(回答) 切断面を見れば、すぐわかります。立木ではなかなか。桐の木も三通りくらいあるのです。地桐じきりという日本固有の木、台湾で早く育った桐(台湾桐、現在は中国桐)、その中間のかけ合わせたもの。地元で植えるのは、どっちなのかは、倒してみないとわからない。たいていは、地桐だと思います。地桐は、少し赤身が入っていて、肌がきれいです。

**【質問5】踊り面は色を塗るでしょ。飾り面は白木が良いのですか。**

(回答) いやいや、それは好みの問題ですから。昔から白木なんかありませんよ。親父が戦後に広めないといけないということで、白木を使った。もともと祖父は仏師だったが、祭事の道具なんかも作っていた。そういうところに面を頼んでいた。戦後に、親父も進めた分もあると思う。なかなか仕事がなくてです。何とかせんといかんということで、白木を彫った。一般の人にも広めようとして。浮立面というの、昔は浮立面とは言わないのです。浮立面というのは、我が家で便宜上つけた名前です。今はもう定着して、浮立面と言ってもピンときんさっですが。昔は掛け面とか、掛け打ち面と言っていた。

**【質問6】何故、男面、女面というのがあるのでしょうか。何故、口を大きく開けたのが、男でなく女なのでしょうか。**

(回答) 男面というのは、リリしい形をしていますよね。角が長い。日本の動物の中で、角があるのは、牛とか、鹿とか、あまり強いとは思えないけれど、牛なんかは力強さは感じますね。鹿は、雄が非常に生殖力があって、男面は先面と言って先頭に立って、後は隊列を組んで、すべて女面ですもんね。だから、これは男が編み出した芸能ではないかと思うのです。子孫繁栄、たくさん女を引き連れたい、そういう願望が含まれているのかなと思うんです。おもしろいですね。



(女面)

(男面)

**【質問7】先生は、面彫りを今は教えてはおられないのですか。**

(回答) 昨年教えていた方が3人ここにも来られていますが、今は、ちょっと勘弁してもらいたいですね(笑)。

\* 松坂慶子さんの公演はH22. 8月7日(土)に好評のうちに終了しました。

【梶原一龍 工房へのアクセス】こちらのHPをご参照ください⇒ <http://www.wave-q.co.jp/men/>